

どん詰まりのときに

菊池玉蔵

昭和二十六年、三菱電機神戸製作所の職工だった私は意を決して会社をやめ、目白にある「日本聖書神学校」を受験した。幸いにも補欠入学を許され、寮に住まわせてもらった。二十二歳のときだった。

所持金は約四千円しかなかった。夜間の学校なので昼は働くつもりでいたが、仕事は見つからなかった。しばらくは失業保険で凌いでいたが、それが終わってどん底の生活になった。相談する人、頼る人が一切なかった私は、ほんとうに苦しかった。

そんなとき父母から「お金を送ってくれ」とのハガキがきた。私は神戸での五年半、毎月父母に送金していた。東京に来てそれをしなくなつたから、父母が困るのは当然だった。父母が可哀想だったが、どうしようもなかった。こうして私の苦しみは増幅するばかりだった。

その上、私は昔の国民学校高等科しかでていなかったから学力がなく、授業についてくのがやっとだった。

そんな状態だった私は、寮費を払わないのに食堂に行つて食事をさせてもらつていた。寮母さんが怖かった。もちろん厳しく支払いを要求された。それは当然のことだった。何と恥ずかしく苦しかったことか、恐ろしい思い出である。

そんなわけで、そのとき私はお金も能力もなく、もはや学業を続けることは不可能になつており、心は錯乱状態に近かつた。正に私は断崖絶壁に立っているようだった。

そんなとき私は不思議な導きにより松沢教会で、世界的大伝道者・賀川豊彦先生にお目にかかつた。私は極度に緊張し恥ずかしくまた惨めさを感じた。でも私はその日、先生の励ましを受けお金もいただいたのである。私にとって永遠に忘れられない喜びだった。

こうして私は自分ではなく、神様の恵みによつてのみ困難を乗り越えてきたのである。